

青砥 藤綱 摸稟案 卷之二

東都

曲亭馬琴編述

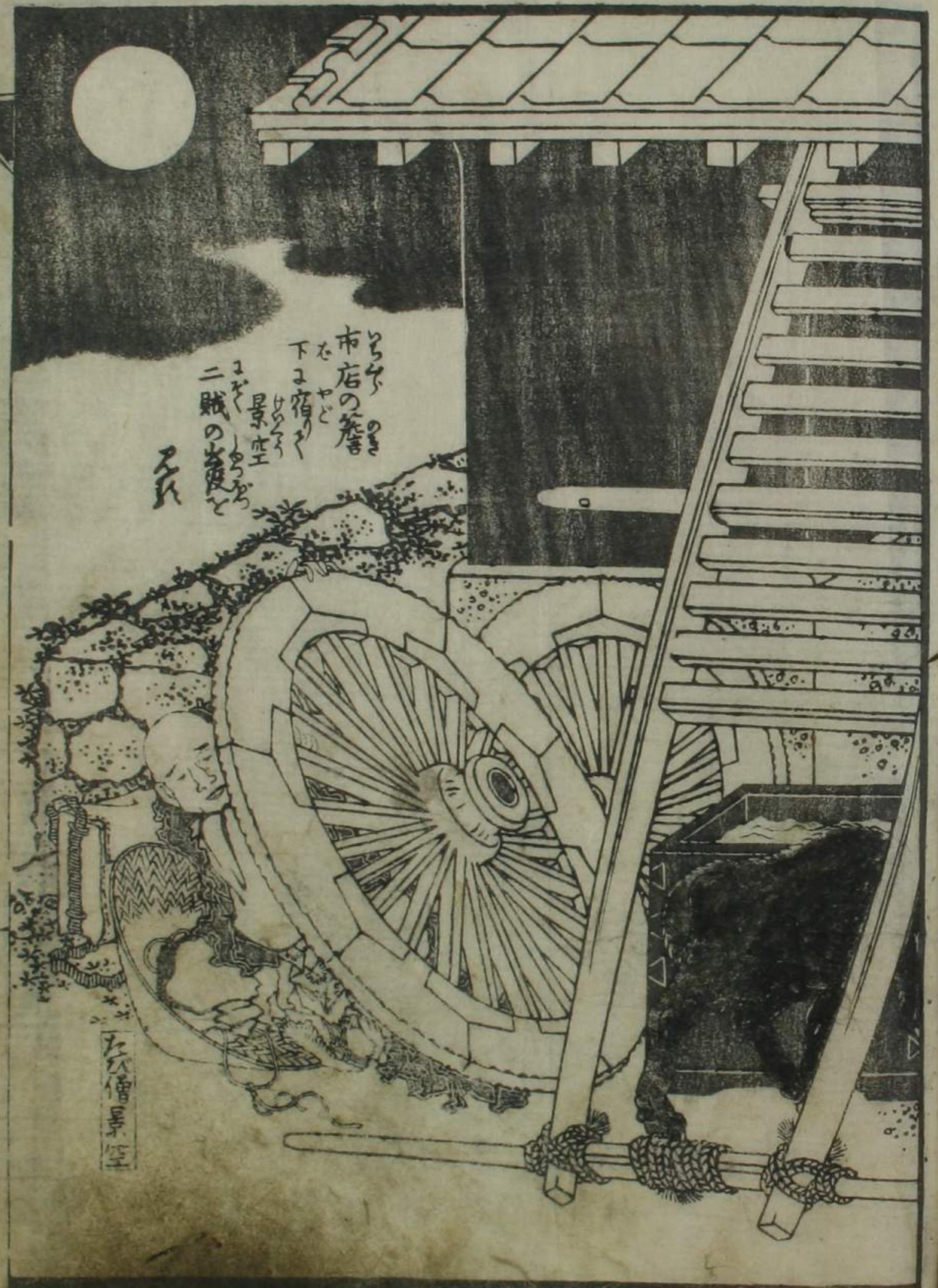
縣井の中

金刺圖書が女児十六夜へ云号のま縣井司三郎侍。既小
自月出ゆべども絶て育耗は。よの左手よ腰えある。女のみ引ひ
毎夜よ處のあきこす。衛門のほくろに立在て彼へやす。し
と等閑きくび物とれども。さう不生憎よ外ざうけや。おなじ事
なる。後金刺が弟宅より百歩を下る東の方へ。間
ある。主人が名をば。一びやか。利九郎とゆきそ。所帶や
あるが。の夜。うち中の比と。何と。ちゆうと頭ふりを取
たる。脚の法師。おほこをよせきり。首筋はりのわ

ちうれども小夜深く。左より門扇を開ざるが。市店の家則り。
店は臥てゐる小廻ども。麻衣懐てる戸をして。客店より移ば。お宿へ
くるひゆへど。とつとつと戻る。圓番もあらず。法師へと見ゆ。暮
宣へてさうものあるべきで。不知案内の里へあそ。せくうすく暮
されば。左をとも右をとも。僧へと宿を開ひふす。更闇て
宿と詰め。全く疑ひすふことを。さて怪しきたりのみあくべ。貧道へ
筑あらる。天童寺の莊よかくさる。船の院の所化す。近屬
師又は身の暇と見て。西海東海ふ劔縁し。りえん簾窓の五山を
順拜して。今宵は金澤うる。称名寺ふ寄宿もむずらひたま日の
暮。されば。門園へ漁されて。敵ども人絶て出ぬと詰め。己と死ぬぞ
とよみて。まよ宿紙をさす。柱て杵さす。口喧ふ憑之

笑ひども。小廻ホヘ果毅。こゝへ寝もせど。併と宣ふとも。おん
宿へひゆひゆへど。と臥てひふひふいふ御な。よりさくが勝るやう。その
簾下と貸す。瞻きび天主。結陰ぬ。捨果て。おへきだりのとお
ども。雪のふる月へ寒くこそあれ。と。後。西行法師のよきだりん。捨
果て。身もあらず。濡足下とぞうふ坐す。あそてつが身の盡
とを終。南無阿弥陀佛と唱へて。坐を取て圓座と。晝の不とう
ふ牽挂する。車の下へ這入る。袖の内みて念珠を真拂う。その
夜のあくゞ候てをり。さる程よ。称名寺の鐘の戸近く。ゆふ
丑の時。ともや。ともや。雲半端の月と吐て。降をすゑよ。雲
頤襟よ。極速て。午二時が行ふこそ。とりびく。身と行の禮よ。身
癖者あり。とよもよがく。かく。二個の大倭す。簾と膝仰

松



且く密語。ありふむ。一隻舟の長高たが。今一個の隅へやと足を
踏み。廻の上へ内りと登りて。煙出の破風門より。裏へ潜り入りと
あ。行脚の僧へと見えたる者も。方々よ教わる。遠奴等へ平々盜賊
きらん。内ある人を呼び覚まさざ。とちよよ。一個の賊へ。外一面ふ
あ。懃よ声と立て。アラ。どう居るか。ちよよ。立たよ。教さざべ。
す。ヤニ見。あ。ド。み信と。そそきと。命を損。とゆれせん。りのと
つうぬふれあ。とあじ。とぞひじ。つづく。身と屈め。と育めせん。りのと
只被ふ。おがまく。まく。阿容。とと見る。種よ。内よ。鞠入。と。大倭子。
衣。さらん。縫。さらん。一袱。みん。あまれる。と。廻上。う。あじ。じ。う。外面よ
立在。う。盗賊。こ。と。受。と。う。脊負。間。件の大倭子。身を取
や。ふ。内。と。龜下。と。此被。莞尔。と。うち笑。て。又。行。ゆ。や。ん私語。す。

物を餐肩へ。西のほうへ去り。彼大倭あらへ東の巷を駆て
脱き去ぬ。法師ハこのまゝ死んで嘆息す。つゞくの後も。奉門ふ
虎と防げば。後門よ狼と進むと。この家の族。勅すよどもと
疑て。拒て宿れ許さねども。却盜賊の入らぬまじだ。あみきて
やね。あぐとそ。彼賊ハもや逃去する。今更よ聞ゆて。その趣を
告るど死ね。よきつと疑ふべ。あらうとびとんか。じとひ
解んとそすとも。證据うけとがむづにしかづ。やう知よテと解ん
よ。臥ぬと更て禍を避くよ。もととあづぶだ。と再三に命
遠く。弓を起。野鷹のやうにまわんととろぎよ。月は忽
りて。驟雨をうちと降りだ。すとく忙慌つ。路の紅葉
迷ひ入り。やくとひまご。三日町よろど。野中の敗井よ踏み出で。慨然

さて隣うるが人の汲ぐる敗井るまば。落葉うつ込と塵埃よ埋
て。底ふれ水ゆるれやゑよ。幸かくに急すとりへども。その深きと
き。一まよあまうぬまび。縛の断つう約縄ふ等く。人のちうとを
備がまび。弥勒のせうで生じ。ええとみ外徃遷の便路うき縄
ゆとも誰かとまく紙あらび。雨へ降やすくて。るむ降らむ。秋の夜
きれびと長くて。やうやくふゆるやうふ。おぐく声をすう立て。頸不
敵ひと求むきども。井の匂とうとるりのへ。絶て一人もあらけり。
案下某生再説。金刺が庭門。弱竹ハ例の妙。人定つくて後
衛門の裏表よ立在て。司三郎とねふど。秋も冬残の比うきよ。夜の
深す隨りと寒くて。冬ようも極まつて。天ひ急だよ。緋陰。又急だよ月
先て。五三の比うつ。今まで青もあらねば。彼人々來まぬま。

口々ハとものまき彼君の。毎夜くみふそくだのひて。胸くすくぞ坐ゆる。
男のこゝろよ喰くる。天どま定められ夜うね。とひとう、こゝろく樹の下ふ。
えぬまくと立在て。まくる主よ傳す。身へ恋ゆく。おぬんをまろ
みへ秋も深あへぞ。今へとそちひくえ。内へ入らんとまくわから。外面み
ひんありて。あひびやうふあるまると。そんとまく。とそふあへぞ。胸くすく
うち猶ぐかで。嬉うね。といふべくもあへぞ。外面ふもこゝろ紙あらてや。
足と懇て滑びう。門下ふすと倚りまへ。弱竹ハ遠く。縣井の
ゆ。まあせう。いへ夜さわとまくせゆ。とく入らま。とひもあへぞ。
やまう門扇と閨をく。とまくべこまへ。彼人あらび。とおどゑく。と
大倭ふ水の如き刃と引抜て。衛と内へ入るよけまへ。弱竹吐差と駆さ
さうじて。賊あう賊あうと叫べれと。二声とくほゆのぎあと見あと



うあげて弱竹が腰をだすとひんと砍ふせが。仰み又仕立り。
やて盜賊の血刀をも提て甲夜は弱竹が生とり。緑燈の戸あら。
障あらうる燈の光と葉みて十六夜が便室に入り衣類調度
きどある物を悉くそら攫ひ。強ごと氣きもろ。舊の
庭門を脱去り。あるふ十六夜は今宵ゆ司三郎とすらもよ。
小夜深りまでいのと麻くをどびく。とどひくくるお忽地脚下か。
武ありと叫べを笑て忙しく臥房を出ふ。膚の粟のひく。毛
立れ。あらねねて。麻で歯の根あら。りその盜賊のこへやまねらへとあ
くて。づ室あら途よ感ひ。夜具紙を引被て、尾風の
た。あらねの盜賊へ物を取らんとらふのを流石よ逃げ
ぐつけ。四隅すゞるを索ふ。只臂ちりあり。物との

櫻ひそげちたを脱きりしバ。十六夜やくやくつよシテ。
鎮よ人を喰ふ不ど。二親の下う。奴婢木ゆかふ紙燭
きりあつ。その火が燄。この光景を見て大至よ驚いた。又舟監禁の
そよふ森と居るよりヤと主も家隸も浴室廁の戸等に
をさら。亦て庭へ走り出でる舟隈ゆゑく猿りとむす。衝門を
半開ミソア。さよばこそ。ごとうへけ。とく門を閉て逃る。
とりたずね。圖書とみづから生まもとそ門の石と石ありたて
足とく。ある陳す。弱井へ觸り。乳の下ちで破裂。鮮血不
塗きて倒きそア。主役一重死を。且醫れ。且呆き。身の葬事の
禮をもとそが中下老僕繁市へ。女児の死骸を抱き
起して。声と限つて呼び落す。既に臂断し直ぐ。華陀ありて。

枚べべくもあらず。身もいといひ。陰ふ。繁市の口喰咽ひア。そ
流く涙雨のどく。悔ひぞかする禍の神の祟の恨く。空に
骸を搖動。よ弱井。安ハ十三の命。母を喪ひ。世よする械乃
あらず。福。冠子の後共當家よはて。十六年のけふもあらず。
今茲ハ九八を。身の暇を乞ひして。驚く。人の妻と。初孫の
顔と見む。どうひ。おとせひ。盜賊のみふかりて。おとせ金を
隕さんと。よや仇人の名をあらむ。木を伐て草を芟拂へ。も
愁と報ひて忍む。形るや。恨く。とせらぬと。死く。もく。
老のく。云果と。天よ叫び。地よ叫び。人ふの羞び泣ふ。がく
あづきよあく。福。あと。弱井。圖書。繁市を叱り激し。すづ弱井。亡
骸と母屋へ昇入金を。十六夜へいざ。弱井が横死を

ありとて。はと灰ふこそ夜生てかへる者死隠せ。とくべよまば障く。
只の潛然とうらづけを當下金刺ハ女廻す對ひて盜賊ハ尊体と
推くと向鞠るふ。十六夜のうでのよとあらぐさ。嚮不弱牛が
賊ゆりと叫びへん。遠く起生はまども流石又物のむらしくて
屏風の背ふ孫玉つ。密と闇窺てする種々圍むやくより刃の先の
星と肉さけ。さぶに寝衣をうけ被きて。あらびへよくもんば。
年の齡もくちをくふや。きの白けし駄皂くり。一切總もぐまと
りばえづくと喫て扇紙顰め。あらうとぞハ弱牛ハ何の為よ
小夜深て漫々庭へ出るぞと向よ十六夜のうの紙。向ふ
おなぐくと改紙低て姦せどさて喪するりのと撿見るよ多くへ
りきよふ。もとどく。十六夜が詰合ふて向張りて遙りの象牙玳瑁ふて送る。

件くろ。そくもる行よ天へぬよけとば。やう弱牛が亡骸と香院へ
還りて葬らし。かくて金刺ハ竊ニ蟹市と呼びそつよや。比家の
厄難不慮ふ起アテ。缺副もうちれ女兒を殺せ。汝が裏傷ちひ
かべ。こゑも又ア鬟よう。只使ゆる女の子みれば悼くちよ所
あり。もううそて死するかのせりふせん。今へん彼盜賊を捕索で
仇と報ふの外あらばく。つゝく尋思する件の賊ハ別人
來。よし。曩ふ鳥羽う。諸事する。縁井司三郎す。に。五ひ
這奴ひく凋落て。身のあた所あるまふ。死とおりでちるぐと
不良の如く發して。づ。宿所へ竊入。行よ弱牛ふ怪りらま
矢庭ふこまく。破綻して脱去するふ疑ひほ。とぞうして鑑持と

るまきがうろくへ訴ぐに。汝今より。這奴が旅宿のをとすを
徘徊して。竊よこぎを張ひ。怪とちりて。あべ。これよ。おふ
と密詔が。繁市旦く沈吟して。況宣ふ。不究て。拵あ。彼人
曩ふ來りしと。毎房々とさ。現手の足力と。紙乃ん爲す。し
女児の仇人。いりで。うれ。役と。正に。登板。出にて。報を。まく
こそ。と。信。ざらて。こころ。果て。ぞ退。たり。かじく。が。繁市。ひつ
三郎が旅宿を。窮人とて。宿所を。生。ゆく。とい。まざり。むく。みく。
日。耳。蘇。金。う。高麗物賣。よ。來。る。与野四郎。とい。ふ。力。の。よ。ひ。ぬ。
え。本。識。ま。る。ど。ら。み。き。バ。道。次。よ。立。う。ぐ。ら。寒。温。と。述。て。墨。毛。毛。を
訊。向。行。よ。繁市。と。ま。と。が。与野四郎。が。頭。髻。ふ。玳。瑁。の。笄。を
挿。て。左。ひ。ふ。銀。の。指。環。を。挿。よ。う。づ。ら。く。ふ。毛。形。乃。摸。様。も。

蔬て。認。よ。十六夜。が。笄。指。環。う。しき。ぶ。う。よ。深。く。怪。め。ど。も。
氣。き。ふ。も。見。り。ま。と。和。陵。そ。の。笄。と。指。環。へ。併。ね。う。り。て。來。ま。る。
カ。賣。物。る。ん。み。へ。幸。の。と。こ。そ。あ。き。弓。主。の。令。愛。ひ。背。こ。れ。お。の
欲。き。と。て。頃。日。和。陵。と。あ。ら。う。り。よ。い。ざ。く。媒。て。る。こ。せ。ん。ど。り。び
よ。の。与。野。四。郎。大。き。ふ。飲。び。推。量。の。ど。く。こ。ス。賣。物。あ。う。御。よ。如。此。の。客
や。店。の。不。と。う。と。あ。う。い。ふ。年。紀。ハ。十。八。九。大。く。う。る。旅。客。そ。う。出。て
お。き。脩。を。ね。び。入。き。が。る。物。を。賣。ん。と。わ。か。ふ。價。り。だ。く。ス。く。買。り。と
り。ふ。え。と。ば。この。笄。と。指。環。あ。く。い。と。寢。く。と。壯。俊。の。所。持。ま。ぐ。さ
物。と。え。ち。が。え。が。ど。あ。う。そ。の。由。來。を。尋。ね。え。ば。い。か。疑。り。あ。ふ。あ。い。だ。
こ。至。へ。近。ア。後。や。ん。ど。る。な。方。ざ。ゑ。う。獲。く。う。お。い。づ。く。し。く。ら。ま。り
う。と。ば。券。書。を。写。て。と。く。ま。ご。と。り。よ。言。諸。意。茶。由。緒。あ。る。人。と。え。え

うがさのとく疑念を散し。價を定めて買ひやうね。もとく金
立地は財主はあつてこまく賣られた。幸運すらよほ富
のままで進みとばまふ。汲みとまりへまでと伝ひきて相禪へ蟹市
ゆみてうちらじ改原お正月が女児の仇人へ。司三郎ふ極めと或へ
怒り或へ欲び。肩から胸を推引め。さらぬさんと笑ひよ邊
憩て与野四郎とはひつ立ゆくて車の轔ちらゆる。主人図書ふ
きよけとば。図書へ吹もありと大き年幼び。さてこそ。立ち推量ふ
一矢くらひど。盜賊を探り得られ。あづらの高麗物商買をゆび
入金よ。且又面うよ。向鞠んとて。衝と立て端近く出。ほど不
繁市へ邊く。与野四郎を玄関よ誘ひり。當下図書へ主計
四郎がゆそあまう。手开指環をそろはして。うちかげ打ぐ。うちを

えて。その末歎紙向よ。ち時。室入後と。たゞめの郊。図書。ま
は。その人よ。活券と。が取と。と。向。ひよ姿と。寝。く。けれ。
人品骨相。ひよ。う。び。え。て。ゆ。が。券。書。を。ば。や。う。ゆ。が。と。い。せ。も
ゆ。ど。因。書。へ。圓。う。る。眼。を。瞬。り。汝。甚。胡。乱。の。く。も。と。よ。と。の
あ。ふ。か。女。児。の。所。お。さ。る。が。前。夜。盜。賊。よ。奪。ひ。去。り。ま。銀。
あ。ざ。と。こ。き。紙。買。つ。と。も。券。書。ま。う。け。と。が。支。黨。の。疑。ひ。る。し
と。れ。か。く。り。ん。ア。キ。ア。ウ。れ。ら。の。趙。を。豫。食。く。訴。ん。ふ。這。奴。を。逃。す。る。
と。り。死。す。け。ば。よ。せ。四。扇。へ。忽。だ。よ。額。を。土。の。如。く。り。て。更。よ。震。宴。を
辨。ト。る。ど。直。と。呆。と。て。屏。う。り。け。り。か。て。金。刺。図。書。へ。遽。く。奥。へ
ぐ。く。妻。の。鞍。よ。盜。賊。と。索。引。と。る。す。と。免。あ。し。俄。頃。ふ。夜。寝。叢。を
數。う。て。嫌。氣。く。赴。き。こ。と。訴。ん。と。も。死。よ。鞍。へ。思。慮。あ。る。老。女。ま。う。が

と夢て良人^を尋ひ。證拠^を取ふ候るうら。司三郎^と盜賊^を。と爲
決めぬ^と理^を考へ是^を。別^は情由^{ある}と不^{仕合}。墨裏^を被
社伎^が。こよみ^をと^と爾窺^はし^ふ。総角^のころ^を下^ろ。人^が
骨^を相立^す。正^うど^も力^のと^くええど。うや食^をよ^なう^れと
不覺^す盜^をも^うとも。十六夜^がるみへ。強裸^{の中}う。云^う。と^ま
るま^で彼^が罪^の我^知る。再^三うひ^かて免^るぐ^れ放^す。と^云を
竭^{して}凍^まだ。金刺^こと^て吹^もあ^ざ。既^て左^右うち掉^て。と^こく^ら爲
引^ぬこと^いへりのう。うや實^の子^こと^て。罪^{ある}と^教え^ばと^教顧^ふ
這^奴竊^うの^等う。漫^ふア^ハ宅^へ潜^び入^る。飽^うで物^を盜^一。と
肚^のより隨^え。又^一層^の邪念^を發^す。強^て弱竹^を犯^んと^{する}不^{後^づ}。
矢^を度^すここ^と砍^殺して逃^う。ふ疑^す。這^奴ハ又^の友^を行^ふと^名と
あそ^ば。壁^を穿^て盜^とう。その罪^を教^えま^さる。盜^とうと^うと^うと^うと^うと^う
可^うり。逼^て弱竹^を犯^えんとせう。その罪^の又^教え^ばと^教教^えた^ると^の
う。可^うり。刃^を舞^{して}人^を殺^せ。かくの姑^の死^の罪^犯へ則^{天刀}四罰^す
む。乃^の人の憎^う。一毫^も教^えぐ。且^つ女見幼稚^と。這^奴と^て
婚^縁を絶^てう。と^も。物^ひどう聘^うけ^まべ。水^ふ書^しる文字^のと[。]
雍^{うん}久^と死^ちあ^まう。あらんや。且^つ今^ア六浦^の莊司^をうけ^まう
う^がら^かる[。]慈悲善^じ行^む物^ゆう。蓋^うう死^みの^死笑^てと^る。進^へあ^まう。と
敦園^て奈^き猛^うい^ひ懲^し。老^僕繁市^と下^りて^いふ^や。そ^の窓^ふ林^辱
よ^のお^四郎^とお^て。薄^食く^ひ赴^き。司三郎^が罪^犯と^訴る。そ^とみ^る
け^の日^へ暮^る。汝^ハ今^ア夜^兩三個^の莊客^を下^り領^て。彼^{盜賊}ろ

旅宿の日とくと離れて。這奴り。又の費用もとる。又嗅つけ。
逐電する。あくべ。向腰打つて。捕縛。努力断つて。
説示せば。繁市へと移る。その准候をぞくとす。僻ふう地
金刺圖書へ。女見が婿縁と。縣井ふ結びくる。今まよ。未
け此處の椿事と幸ふく。司三郎と罪なり。ようづ後をく
ちて。女見十六夜みか。富て威徳ある督と。招得んと。ひくべ妻の
疎とも。穂ど。従者ホミよ。延尼郎と。至こそ。薦食へ赴き。すづ
この達と主の頭時ふ告報し。迺頭時の文書代清て。文は所へ
訴けり。時不引付の頃人。辨定裏の上坐する。青砥左衛門尉藤井
文書を披見す。金刺圖書ふ。この頃末と讯問。又高麗物と野
四郎がナリと。所々よく。件の糸と指環と。展檢し。かの如く
した。彼司三郎へ。芻より。ざるの罪人なり。汝ホ且く退け。
さづ彼の心。攝捕て。鞠問し。そめらふ。又聞とあくべ。どりひくべ。
金刺へよ。時に郎をみて。坪の内を。退出り。かくとへもと。縣井
司三郎へ。十丈大丈丈。俄頃。又お病の積聚
度り。ひどく。苦げ。骨とす。夜と。枕方と。そぞ
看病と。その夜よ。十六夜が。もりへざる。あくべ。事の起を
人傳ふ。告き。あくべ。胡越の如く。そぞら。貯蓄を
旅宿す。減多。余饋も自在。と。おのゆか。よ。経費。恵比
堀。と。ば。有一日。旅宿のやうと。る。高麗物商賈と。い。金を
裏ふ。十六夜が贈る。玳瑁の糸と。白銀の指環と。估却して。これと
系剤の價と。次の日朝。あらね。又系剤と。ふと。旅宿と

生て侍役川の河とくへやく移ふ。忽ち捕ひの兵士五六人。乃後
左右を推取卷矢庭ふ司三郎と傳り。簾食を投てましけ
正よ是鷄の燕雀と廻ふ異あらず。承べ。司三郎へ一言半句の問答
なせど。云はば。犯せる云々ある事みむ。今そゆの在ありと。斯
うで幸免めす。あらん。吾儕の邊へ數多と。今近もやうと
離きど。母山とがえりし。けり。雅うつよかうと。湯茶を
進とくと。とくべ胸のミ塞うと。こ絶へ背へ又向。引と親と
公の縛の索と恩愛の絆ふか。華へ。只そ天のあとと。あ
りてありふ。可うびとせと簾食の文注所へまく。一
捕ひの兵士等へ。司三郎と洋の内へ引方く。延尉簾綱の事と
待てさう。清妙よ金澤の商賈ホいと。瘦勞ヨる法師の年紀

三十をうるゝ。縛て。訴陣ふまく。こまく。も延尉弓
矢を絆り。且て青砥簾綱文注所ふ出。當下捕ひ乃
兵士近く。もみて。伊勢の旅客。縣井司三郎と擲捕て來られる
よ紙吹えあられど。次又金澤の商賈。もろく。小勝とぞ。め。
金澤称名寺の門外。又。典物店利九郎。訴へそちる。りあれ
夜更闇て。の法師。頻ふ某が門と敲きて。宿と投ひ。一。小夜
深と。まへ入。まど。これが家族店ふりの承べ。止宿のひらかひ
ゆうど。推辞ひ。一。が。ちく。今宵へ。との誓下ふ際を。ぐ。と
ひく。そちて。その後へ。もせど。夜むけ。て。まど。この法師。りうの
船ふり潛び。入。けん。物夥盜去。て。その往方を。あらざ。此首。被首
と穿鑿。一。が。破風門。乃尾と。端破く。る。あ。又車の下。緋代

金あり。こよよぐて、その夜の盜賊の門を敲て宿をねる。候。而
あるは紙疋。又破風より滑び入り来る。久良も見。かくへふ
ものびくふ。その往方を索ゆる。如ふ天の網。かけられて。遠くへ逃れ
まくらぬぞ。づくふ三四町ある。酒井の底ふ墮する。流石は深
けとばぬ。出む。第三日のみふ至り。そ彼井の中より索縄。護る。
乃に金とねく。所ある事へ文書よ異なり。と述べ。藤綱。笑て
うち急改。まづ絲井を近く引居させ。やまと司三郎。汝が又魚太郎。
年來繩金く交かうる商賈。みとべ。つゝもさきく。その人とあらざ
候。吹つ。ちくふ汝の私業を承め。顧も。漫々友人を離散して。
亡父の女。金刺図書が漏泄。滑び入りて。賊どろとのもみだ
下女弱竹を強て姦せんとて。却て金と斬害と。これ何の悪行ぞ。

且今金澤の商賈利九郎が捕獲て訴ると。此の賊。僕も同夜の
るふて。時刻も又符合せり。おりよこの城傍へ汝が支黨黨あ
居。又奸をも。賊をも。ひとまく紙も。とやかり。暗き所あ
神明こよ紙鑑玉。御殿前へ王道とまく紙正と。その夜。汝金刺が
宿所。そて盜る。卒と指環を。る頃物と。也に郎ふ。售るよ。
彼商賈。閻書と。共よ訴よ。證跡既ふ分明る。汝不陳るふ
由。あやとい懲る。司三郎額を著。こひかりひうちぬ誣言と
せられてこそし。某七歳ふ。こひそと喪ひ。母の手ふまく。人とされ
ども。産業既よ滅却して。親の活業が嗣ふ。すまし。商賈あ
ども。又文学の才。代よ起てゆ。某又幼稚。若手よ。ゆひ
あれども田舎よあらへ。跋躠ん。うもがもす。家へひそく。矣。

簾をくだけ。と母親のいふふたりして。駄子とのだへまつたとへ。あらぞ
あらぞ。被金刺圖書へ。下り利平二と。伊勢の多賀
在と。親みて。魚太郎が。竹馬の友ふひ。加藤。彼人の女見
十六夜の強縛の中より。某と。嬌縛と。往びて。ば。彼人よほり。み
身をたまう。と。もあづ。と。ひゆひて。もしくと。身よけ。と。彼人へ。腹
くぬくて。約。背に好を忘。強面りて。うゆくら。再び。弓も弦も。
あれども。既。友々を遠く去りて。憲む樹の下。み兩。と。偏見。進
退。と。凭。アソ。いふと。御。且く。金澤の旅宿。よ。通。田。そ。繫。ぬ
私。の。どちらか。それども。年來。学びゆ。聖。徑。史。傳。の。旨。と。せんじ。
順。逆。清。濁。の。理。と。あ。す。ア。従。飢。ま。通。る。と。差。走。の。食。後。て。受。を。
す。や。渴。み。堪。ども。盜。泉。の。水。を。が。飲。モ。便。彼。笄。と。指。環。も。

十六夜が贈る。小母が薬剣の價。せんとて。商賈。よ賣。れの。と。
廷尉。絶ぐ。賢察と垂り。と言。爽。ふ陳。ふんべ。兼綱。笑て。うち
不う笑。ミ。さあ。と。も。まう。と。不。前後。甚。相違。す。汝。曩。ユ。圖書
み。ほり。と。の。地。へ。あ。れ。ど。も。い。と。強。面。り。て。る。と。れ。て。再。び。彼。を。訪
ざ。ふ。あ。ざ。と。や。あ。く。と。が。何。の。月。づ。き。の。時。ふ。彼。十六。夜。と。面。會。す。
笄。指。環。と。投。惠。ま。る。と。推。く。と。と。と。と。と。司。三。郎。へ
頭。を。低。き。黙。然。と。と。と。と。と。と。青。砥。呵。と。と。と。と。と。と。り。く。お
ゑ。と。ざ。れ。ば。盜。賊。の。名。人。削。き。ど。り。そ。の。と。と。寘。み。と。と。縁。由。と
い。ひ。が。く。れ。や。あ。く。と。べ。汝。ハ。十六。夜。と。密。通。あ。る。ふ。こ。と。と。り。く。お
司。三。郎。ハ。忽。地。ふ。赤。面。い。よ。赤。ど。か。く。て。又。森。綱。と。行。僧。を
近。く。引。き。え。させ。や。と。と。悪。僧。汝。ハ。司。三。郎。と。同。意。と。利。内。節。お

鄧へ附び入。又金刺が婢女弱牛を殺せ。致真の玉家みよ
あづく。本貫へ何國のものぞ。と名告と責問つむ。
法師へ騒ぎよる。某へ原免帝天童寺の上り。
圓澤院の不化よ。景空堂と呼みゆきのふゆ。師又は辭別して去る。
御衣糧不とく芻。有禁。漫よ恩公發りて。いぬ夜金次ある。
商賈の土庫ふ滑び入。又ふ金刺とよんが宿所ふ入て。物夥
盜もとく。壁とまんととろととよ。一個の女の子よ追走す。己と
ぬ。矢をよこれと殺害す。里ふ伝て逃失んととろ行よ。懐て因
井よ滾落す。底よあくと二尺よ及びく。かく捕まてゆども。ちの
は僕とて絶て縛よ。某既よ天罰の脱きぐれとて下りて詰
字す。まづら罪の大なる死をと。つらうとの仕役とんすよ。ど

寧々くへりども頗富貴の相あり。盜をもぐさりのふあらば。
且その母をもりとひと切る。盜賊あり又仁義ある。首領續る
すわくとも。がま孝子と連累せば。吾黨のゆふと速ふ。のみ
状俊と放へまひて。法の如く某を罪よれひゆう。と憚る兎色を
もとば。あまときく。青砥ゆてうち笑ひ。汝がりよ不胡乱く。あめ利九郎が
脣ふ滑びへて。夥の物を偷る。又金刺が宅ふ脣びへて夥の物を
盗みたんや。以て贋物あつべ。らきよとがりよつゝ又弱行ふ
追走すと。已てぬるぞ。これを數え。まんあんあん。以て用せり。す
べ。もの多そぶひよあらる。鮮ふこよめぬゆ此彼りうて胡乱す。
りふくと。猪ト見て。景空且く沈吟し。某その夜。利九郎が
鄧ふて盜るの娘。路次ふあく隣あたま。また金刺が齋門

みて弱体とあらんと教せらるべ。こう領ふ愧恥御猪戸奴を
望てまるとそ。圓井よ滾落たり。財物とみみ送り。刀をも
失ひて。又あへ一物ども帶びて。況ても下の財物を顧みふ追
え。奉狀物よおわるはとべ。隠せし氣を忘れて。と室ふ志
やろふいひうむきば。青砥ともうへち。利九郎ホとくらす。
後手の法師と生拘とも井の中ふ。圓桶の物へなり
や。と向ふ。井の中あへの賊僧が。項よ掛ける。陀食と
菅蓑一領あじしき。こよととばかりて。まくろ。この條の物へ
ぞ。と回答。蓑衣と。陀食と進す。それば。青砥ともぐら。づ
陀食の口と開れ。内うる。物とひとくふ。展覽てうち。乞食。金剛
國事と利九と。その夜ひとく物と盜き。又ひとく賊と構

よりて二賊と鬪向られ。一個の賊又あらと陳す。あられども
財物あ。一個へ言下ふ。賊又と名す。あれども。財物す。
中かゆ縁由あらん。アミ太く。車の情と。揚る。あくまでも
盜賊と。へりと。とも定め。且くこゑ。獄舎よ繁ん。
利九郎おへ退坐。と。の暇と。の日。廳へ果みる。

縣井の下

青砥左衛門尉藤綱。次の日又文注所不坐。司三郎と不坐。
役手の言と。十六夜と。情由ある。申せり。景空既ふ。り
す。紹介をねども。彼弁と指環の生す。あらゆる。御圓桶
宅へ入る。賊と。彼法師。もとも定め。ひすり。あらゆる。
あらせ。着る。と。説教せ。司三郎額を著。廷尉の仁慈天

日と夕方。このつりうどへらひゆひ。母の歎きの痛む
けむ。蓋やかましく笑えあがん。某曩古。旅宿の後。始て得
堪む。毎月ふ金澤文庫の母へりふりあにて。続書講義の声を
聞て。仰憂苦をうそと見えとぞる程。金刺が夜のうとうと往還せ。
あるふ一日。十六夜よりび泊ら。近頃より別離の情と述。その春
よりと訊問。ふ。彼未通女がく操。又図書と異ふて。捨ぐれた
名ひあり。とく。某不覚よその癡情より。膠縫のかみひと
うそ。下女弱牛と媒妁うて。密山の夜の数里す。ね。さとす
彼笄と指環。十六夜が贈る所受がさりて。旅宿より。さとす
者。毎日本の旅費勞。俄頃より病臥てゆべ。晝夜と看病。
素剤ハ價の貴を厭む。此彼の物多く費用を積む。僅十日を

よそ。盤纏竭。已と紙ぬ。曩古。十六夜が贈る。玳瑁の
笄。自娘の指環。高丽物商賣よ。售て。湯糸の價。と。傍從
川の布口する。医脚絆赴くわゆく。拘捕とて。すこよ
乃づ。と賢公の一條をりて。その罪よあざる。紙奈。ひひ
放くらむ。母の條令を保ぐ。偏よ赦免す。もと。と一五
一千を演く。青砥はくとて。直紙。すこ。と密通せ
す。つよ。仍くみあざる。と同じて。面りふ向う。すこ。と下
ト上べた。彼女すれど。あざと。彼後を。よびひよ。と下
と。あざと。青砥を。あざと。彼後を。よびひよ。と下
され。難色。あざと。青砥を。あざと。彼後を。よびひよ。金刺図書
へ。女見十六夜と伴ひて。廊より。従くまつ。行僧景空の枷とく



ちきて坪の内へぞまづく。痛人いた矣い十ニ夜よハ勤心不^ふ同^うと郎^おふ。
贈りて^きけり笄^{くわ}と指環^す疑^うそ。情郎^{ひやう}ハ膳食^{ぜんじき}の獄食^獄も
あ^はと改^かえ一月^よ。涙^{なみ}の哀痛^{あいとう}未経^{まつ}よ。海^{うみ}ともありん船^{ふね}もひひ
深^{ふか}歎^き歎^きを紙家^しあるゑ^ゑ毎^{まい}。坐^すもあざれべ。頸^{くび}よおわら^{わら}ぐ
もとてひきう寝室^{ねしつ}よこりゆか。衣^{いぬ}引^ひ被^{ふく}もとて臥^くふ。猛^{たけ}
搔^か痒^{かゆ}よく^くむき^く。文^{ふみ}活^は正^{ただ}ある。新^{しん}舊^{きゅう}もよりのくら。推辞^{すいし}て
己^{おの}づれよ^よタ^たき^きが。かくらくゆ^ゆ又^{また}よ^よ往^むひ^い。養^う子^ののふとくみ
あ^はう。正^{ただ}よ^よ是^{これ}ああ^{ああ}も^も。柳^{やなぎ}。周^{まわ}ふ痛^{いた}る園^{いん}裏^{うら}の花^{はな}。吳宮^{ごくう}
ふ西^{にし}籠^{かご}が幻^{げん}思^{おも}て。簪^{くわ}て^{いて}よ^よ義^ぎう^うが如^ごく。うん闕^{うん}の王牆^{おう}か^か胡^ご
りきよと^とれ^はて^てかく^く妍^{うつく}し^し。さくま^まバ司^し三^{さん}郎^おが^がい^いく^く縛^は
らんて岸^{きし}の内^{うち}よ^よ引^ひき^きれ^る。痛^{いた}く^くもいと陳^{ちん}すく^くて^て夢幻^{ゆめ}とも

辨へと背向よりてぞ居りけり。當下青砥森飼へ。清駒
子よ對てひよす。圖書が墨裏又行る本算と指環を
司三郎を械ことねやうせども。市人利九郎が搦獲する。是處
傍らまごを受むと弱牛と交じる。その夜の盜賊あるよ／＼を
首伏せり。もれとも彼算と指環の出ぬ定くまづ。又よせりて
司三郎を鞠問とする。彼日本十六夜と密通す。ゆうと件の両品は六夜が
贈りしと老母の業創の價にせんと。高丽物商賈み售る。まづ
りころり寘あふべ司三郎へその罪はあるべど。こまづの虚寘されり。ま
とそ十六夜とび召しる。といふ所とありやと聞べ。金刺圖書小判は
もあそへえよ。跡も形もあたるみて。全彼の巧てやうに。ま
こそ廷尉こまく死を蒙り。比國御の好を乞ひ。彼杖俊が汚名

と紀某がて對面する。こううなぐるすのをみせば妻ゆめ女見あわ
る。拿せどいと強面りてゐて。そのうち寄つたぬよがく十六夜
と密通するふとがやれども。且その夜の盜賊と闘竊して、本
の十六夜より勿論女の方へとあれば十二か月恐怖も定らふ
こと。又恐れどりども法師すうとくはめもあらず。却くよ彼賊僧も
司三郎が支黨みて御使兼ある力の弱い輩と見ひろふ。うけと
ゑれと吸きまことに。こよこのす紙を手に。虚實分明か
りしんと辨ち退て回參り。青底既と左右ようち掉り。なほ
淫奔へ紀のあざざるすまえ。加旗司三郎と十六夜との雅樂院
親と駄が婚縁と結びて。うと欲。司三郎と互とぞ。あつて彼お。徳ふ
ひき情を運て。密通する事あるべし。よ十六夜司三郎と密會して

彼笄と指環と贈るす。あくや。又その夜の盜賊へ傳うり。飲
俗ありし。詳々こよ紙りし。されどもあそぶやく。ども禁戒をうふ
を。あづ向ども十六夜ハ又図書が發跡一比も。深窓の下ふ人と
きうて。圓の外へ絶て見え。今この時あらゆる。は場よとえられて。タゞく
ひ安らぐ。且もそれ。且羞て。一言半句の回參を忍せざ。既と併て居
たしき。司三郎ハ又の形勢ふりひひほ。と焦燥て。向上す眼中念を
あら。うへ憑げられ。吾妹子うね。かん身今夕口と辨て。問せゆふ
いふ。庶まうさざれ。づか実言ハ虚言と喩々す。罪をして罪よ死すん。
所余の保るてね天と怨ん。欵る人と替り。一下とび寢窟よ余を
隕うべ。亦の人うつが為。車の虚実をひひとく。それへとむるを
かくもすれ。旅の宿よ病む母の後の歎とも痛く。あの玉の端

主地。絶りうん教。とちひゆうが。方す亂き腸断難も。送恨云祭よ
竭。每骨の私。天神地祇。と。うきて。物。し。へ。虚言。少。一書
ぬ可。怨ぞれば十六夜。こよ。激。まじて。やく。ふ。と。摸。笄。と。指。環。
の。夜。つ。く。司。物。ふ。贈。し。物。よ。修。し。まよ。そ。の。夜。の。盜。賊。を。僧
さ。し。や。俗。る。し。や。定。く。ふ。怒。付。よ。ど。ち。そ。く。回。音。く。金。刺。ハ。備
痛。く。女。見。と。え。く。る。眼。と。瞪。し。や。ま。ま。十六夜。そ。く。仰。る。し。親。乃
意。欲。ぬ。あ。く。で。彼。盜。賊。を。入。き。る。教。淫。婦。不。孝。の。天。下。
う。文。注。不。す。て。か。う。で。羞。と。が。す。も。大。膽。無。教。言。語。断。懲。よ
威。され。て。お。み。と。死。り。よ。あ。ん。糸。定。め。て。彼。両。品。と。司。三。郎。よ
贈。し。る。の。い。れ。が。ど。と。ぞ。か。ま。せ。せ。く。り。れ。ど。よ。と。り。な。す。け。が。簾。綱。これ。を
推。禁。あり。十六夜。既。よ。司。三。郎。よ。彼。笄。と。指。環。と。贈。り。と。ぞ。か。ま。と
る。あ。く。る。ふ。通。く。て。ま。ふ。あ。く。が。ど。と。り。へ。せ。ん。と。そ。く。れ。い。く。ふ。が。や。家。ふ
在。る。日。ハ。私。が。ひ。よ。威。と。り。て。懲。と。る。も。あ。く。り。簾。食。殿。の。文。注。所
か。そ。簾。綱。仰。と。承。く。こ。の。一。件。の。善。惡。邪。正。と。礼。も。よ。汝。が。云。祭。と
借。く。ん。や。い。と。嗚。呼。く。と。叱。と。れ。が。金。刺。圖。書。ハ。さ。一。當。る。奴。く。よ。被
あ。く。て。畏。く。て。ぞ。居。く。う。け。る。夏。綱。う。き。和。て。圖。あ。よ。り。ふ。や。十六夜。が
淫。妻。ハ。門。戸。の。固。ざ。る。よ。う。起。る。本。是。私。の。由。斷。る。ふ。却。こ。の。ち。の
女。婿。を。室。か。く。て。の。家。風。正。こ。り。り。ん。や。こ。よ。由。て。判。と。れ。と。れ。れ。れ。
司。三。郎。ハ。盜。賊。よ。あ。く。が。ど。あ。く。れ。め。ま。ど。景。空。首。伏。し。弱。牛。を。殺。せ
と。す。に。エ。モ。又。信。ド。か。ア。故。り。よ。と。る。き。が。彼。の。酒。井。よ。墮。る。
り。ど。も。そ。の。や。と。う。ふ。刃。ア。又。賊。物。と。え。ぞ。こ。よ。く。心。猿。白。あ。ド
され。ば。司。三。郎。も。す。く。疑。る。た。と。死。る。が。金。刺。圖。書。ハ。女。児。と。ど。り。よ。

簾食よ。達圓せよ。亦復肉とあるべど。と絶尔し。この日の腰へ黒子
けり。さる程よ。夏綱。五十子七郎。浅羽十郎。と。雜乞二人よ。計策
と。授て。金澤へ遣さる。五十子浅羽の姿を変て。彼此と隠綱。まみび
あり。びよ市中の風味を喫くとらじども。いまざひともも候りをなむ。
かくて又。侍従川の下さるふ。葭簣走めぐして。里人行客の憩所あ
と。茶を賣る婆。さう。されば。彼此人毎日ふ。集合して。おの。あく
さゑぐるる物。さうとする。役よ。好車のもの。その怠と貪り。宇治の
尻掛茶屋と。ゆびけり。むすり。宇治の亞相隆國卿。彼此人よ。今昔の
物。さうと。さくら書ひ。あさす。紙と。今昔物。表と。又
宇治納言物。表と。もりべたべ。かり。う。五十五。浅羽。わらひ。う
の里人。が。毎日。よ。夜よ。さて。簾食く。交えかずる。さぬよ。打拾て。おの
四表八表の物。さうする。ビ。又。簾食の風。變る。ん。ど。間。缺よ。婆。さがりよ
す。じぬ。こう。金澤。み。て。両個の盜賊を捕獲て。簾食く。う。く。う。と
見けり。しよ。一個ハ年紀三十を。う。る。行。傍。より。又。一個ハ。仔。勢。の
と。お。毛羽と。やうんの旅客。さうと。う。い。て。年才ハ。い。年。二十。ふ。三。う。ざ。う
男子。う。れ。さ。ても。彼。お。ひ。い。ふ。う。り。けん。和。君。達。ハ。毎。日。よ。簾食。へ
赴。さ。う。う。が。それ。が。う。り。けん。黒。う。ど。も。傍。せ。む。い。ぬ。ん。と。い。へ。両。個。の
難。色。へ。ゆ。う。う。う。も。向。う。り。ら。き。て。津。よ。舟。と。獲。よ。る。こ。ち。され。ば。と。よ
彼。行。傍。と。壯。伎。ハ。一。個。ハ。質。庫。よ。へ。て。物。夥。偷。と。う。一。個。ハ。金。刺。ぐ
廈。門。す。て。下。女。弱。牛。を。射。と。う。罪。藉。既。よ。定。ア。て。僧。も。社。夜。も。由。井

演にて首を刎らるて死る。者傷その刃歎かれて面うるゝへと
真一やうふう物うれべ。婆くとまを吹ゆあひぞ。ある痛すや。呵責の
咎口よ塙ぐさりケン。罪名く取罪と身く負て刃の清とありケヨ。
了陀仏ミと喝。ふそ。五十子法羽同を往。姨母そん仰と宣ふぞ。
彼ホハ真の盜賊を犯人へ別より。強ちよしゆとり。わゆ
傍よくもくびとバ。婆くの因互て然止ぬぞ。ゆを抗つ。声と密め冤
狂よ命を隕すも。過世の業因ゆづけきど。彼一件の盜賊ハ法師と
旅客よハ候とぞ。正しく別より。ゆをといひつ外而スルノモ
立子法羽耳と側。その盜賊へりるるのぞ。笑て益々をぞ
えぐ。皮果ざくんゆ迷惑し。といひきて婆くの勅す。今よこを
あすふとゆ。ひひ種そ麻几ヌ承と傳せ。被盜賊ハ別よりと。既ユ

罪人ふ定くと法師と旅客と首刎とぞとり。犯人丈丈紫
もあじ。とれども。吾口づく人の善惡を。りんむようとれ。小行
ふきと。聞くよ既止。にゆくよ若ゆみ。その夜。子母家の
貨庫ふ済び入りて。物と盜ミ。又金刺ぬの第宅ふ入りて。物を
盜ミ。剝女子を殺ーする力の。この川下る。骰子打ふ。小神の我本
八九滑の。与東をとほ。兩個の悪棍。不考。法師と旅客
拘捕らき。比。我東八も。与東太も。つて害物。三浦の。く
逃る。が。流石。よ宅を。ゆう捨げて。や。まゆの。なりしと。さん竹。れ
この。こく。うる。里人。へ。彼ホ。がくと。あく。る。も。あ。れ。ど。寝。せ。れ
る。が。あ。そ。れ。て。蔭。言。い。ふ。り。の。ゆ。み。よ。お。み。じ。と。く。み。ま。よ。せ。り。い。そ
と。ひ。そ。め。た。て。物。詰。ま。べ。五。十。子。法。羽。ひ。く。の。中。よ。う。く。飲。び。る。身

さすねありりして。だ脅ホガ隠宅を向ひ。婆ミハありハざモ無シ。家
まで。叮噹トハ言ハズベ。今ハ十主ハ皆モ吹き。二人ハやがて茶房をま
土途みて捕手の准候と。彼恩棍ホガ隠家ニ赴き。接し。酒を喫てそ
門より張へバ。我来ハ与東太ハ生居の主を下す。對ひて酒を喫てそ
居テ。千羽五十主と。おどそよけきと。筋度。うり
年辞と。きアヘア。簾。禽殿の嚴令。索と被キ。と。骨度。うり
脊一腕を丁と捉えべ。こうる。と。両個の恩棍。りうと。小手を
起して。組せんせんと。狼拂ひ。席薦を置揚て。盾。須臾。柱。ふ
け。五十子も。清羽。奉法相撲の奥義と極て。せえて。捕手の
達者。アヌ。バ。暗込。ま。奪。懲。五十子七郎ハ我来ハ取て。押入浅羽
十郎ハ。與東太を組伏て。矢庭。索と被。こうる。か。て。有。支黨を

穿鑿。宅の四隅と。展檢。ふ。彼ホガ賊物。身。夥。の。壯客
ぞと。傍催。と。ごと。赤闌。と。襖。て。両個の恩棍と。簾。全く。領て。争て。
青砥。藤綱。の。車の趣を。告。よ。け。と。ば。夜。寝。ゆ。く。故。び。と。五十子。浅羽を
穿ひ。だ。階。与。东。太。小袖。我来ハ。と。鞠。向。む。ふ。彼ホ。既。よ。證。拵。と。さら
きて。一言半句も。陳。よ。み。の。す。人。ぞ。近。こう。打。べ。れて。賭博。ふ。幸。う。ほ
く。ふ。兩人。潜。よ。示。し。あ。じ。つ。ひ。め。利。九。郎。が。質。庫。よ。入。て。物。夥。盜。く。
こ。と。か。我。来。ハ。と。脊。負。と。先。へ。ヒ。と。ま。そ。ハ。す。母。彼。此。と。窺。あ。く
移。よ。金。刺。國。去。が。庵。門。よ。至。じ。と。内。ふ。女。の。声。じ。て。彼。人。あ。り。せ。一。欲
ぞ。入。を。と。吸。う。と。う。こ。へ。少。密。ま。と。ね。ふ。こ。そ。と。猜。と。外。重。す。り。
と。れ。ば。や。ぐ。て。門。扇。と。聊。を。と。う。笑。ひ。と。忍。び。て。衝。と。入。と。ば。件。の。女。の。ふ。り。
教。す。た。賊。あ。く。と。叫。び。く。矢。庵。よ。刃。と。門。援。て。一。刀。よ。砍。倒。直。ま。母。屋。

五十子浅羽
与東太我来ハと
生拘る

我来ハ



あひびへりて。ひふ掌のの矢悉盜とくよ。一五下と前代をすき
のとひよ。この両個の悪棍ハ博采久うとして常の産あへん。人を虐ぐ
物を掠る癖者されば。このとれとげて。あ頭へん。屢々獄舎を駆られ
う。かくて青砥簾縫。兩三日を経て。金刺圓表。又その女兒十六夜
高丽物与せ四郎。子母屋利九郎ホとて。すそを金刺と利九郎ホ
たる物を指示し。りゆく九月甲日の盜賊。すややふぞ実をうど。と
件の図書と利九郎が依頼ひするあうす。と問は。兩人ひしく懸
ひとうくふ展覧。宣ふどく。これと此とく某が族也。彼と彼
うとり。青砥呪てうち占ひ。あうとたる。緑井司三郎と。行
つ。その夜の盜賊。すあひ。又弱牛を殺せ。力のあひ。犯人ハ
物どもや。だ。鴻与東太と小袖我来ハと。と。生。と。下。と。

うけまつてつと處して獄卒丙三人。与左太兵衛。小助をうけて。牢の
内へ引戻す。有抵毛多くら。圖書ると利九郎ふ。件の悪棍ホを指しし
這奴ホへ。侍徳川のやうふ在うそ。きく。掠奪紙もとある。トナシ本
我武八といふ癖者なり。這奴ホが肩伏する。同様。如此をことと
る。洋木鏡。かき。利九郎が物を盗もうる。この両組の城。又弱出を
教じて。金刺が物を盗み去る。奴へ。与左太兵衛。あらう。ふ。奸偽。素空。懲て
個井よ。墮する。あ。の疑也。終。よ寃枉。本敷あぐ。ある。ふ。彼法師。一言半
句。ゆ。陳せ。きて。人。を。教す。物。を。盗。る。り。の。へ。これ。う。と。り。り。と。つ。り。
とう。ぬ。ぐ。く。竊。よ。丸。及。と。竊。よ。道。類。法。體。殊。拂。よ。そ。盜。と。す。ぎ
力。の。よ。あ。べ。且。そ。の。面。教。よ。く。司。三。郎。ふ。肩。く。う。ど。よ。す。と。く。疑。解。と
彼。が。既。陀。食。を。展。後。よ。乃。で。裏。よ。一。卷。の。度。帖。わ。伊。勢。國。毛羽。の。湊。

縣井魚太郎が長男乳名小太郎某年某月某日祖母の重病平愈
の為父の令下よりて出家剃度せしめ法名景空と賜ふ者ありと
写して同御輪滿寺の印文ありさればこそこの法師幼稚となり生家
を離れば送よ面とへ禱り承どかとて寺と罪を犯する。此伎の名字を
き。さて刃三郎と争ふことあるなし。もぐら罪を身に負て才を放りんど
さるふこそいと憐むべしりのどもうね。と即ちく嘆賞。假よ獄
舎を繫てどりども。一トとびも呵責をかざし叮嚙よ勵りせ。けの日
傍の人と遠離。漏よ彼が公操と稱賛。このたへあつて本懸をたず
ぬれば景空頼ようぢ泣て今ハ行を匿ひ。貪通幼稚とてたゞ
出家して。つい程のとく序文を携方ら玉筑翁天童寺の莊園修院へ
赴きてゆひ。あるふ父の教訓嚴重にて終て下よびの信とぞ

許されどゆべひとのつじへらひあぐ。二十年來遠離只管内典
ふ乞を委託正念正覺の修行する外化する所しふ近属毎夜々
居るる豪の領ふくろよかうゆべ猛よ師足よ暇を乞て久しき
左御へ立つて吹けば哀れたり。又へ身もあらずてそや夥の年を取る。
あるふ遙後よ出世してその名よ安也あらざる。方舟三郎といふの
身も苦よ逼きど母よ車てひと孝行するのうとば母駕のいふよ住て。
又魚太郎が叶ての友する。金刺某甲ふ身を寄んとていぬ日親子
餘年経て友人へゆく。やうや有けん。傍そと追跡て薄食へゆん
とて夜を日ふ縫てえだる到り。彼金刺が宿ふと聞バ。金澤文庫のう
るよ。あゝ人のひふうと。彼处へ赴んとす。日ハ朝と。不知案内の

途よ進ひてやくろり。夜の深うれば。商賈の門を敲まそ。宿泊を
投ふ許されぬ。已とてひど簷下る。車の下よ遁入て天の井と
往ふ。兩個の癖者をひびとうて。彼廊の屋根ふ登る。壁と窓を
裏面より。物験盜す。死面くえてゆじぶ。一個へ外面よ在る。家
内のりのぬ。学んで。五日備急地よ教る。エリヤと附て。阿容もと
うちあひて。盗賊をやも出去よ。重とこよみて。まご。吾備
必疑え。餘外へ座坐を代ふ。漫よ彼處をそむくと。忽だ
洞井よ痕落。度よ在る。三日にして捕まそ。ひも。もれども犯せず罪
を免め。といひ釋さん。ところひとつ。文流亞リ。もとてあるふ。これよ咎めた
罪人の。その名を妹井司三郎。と名前を隠す。送よ廻へ認めた。
紛ふざめあふぬ。おけり。とぞやあらぬ。こふぼうく。

胞足才が爲る。余を記せば。過世の惡業より入れてや。とくに脣外の
羊とさうぬ。母の爲めにもほじふるまで。つゝ幼稚うる遠離て。二十
年ありとさう。とれどもひきあきてや居りふらん。今より才が余を隠
さば。老ふる母の哀傷へ。此ふ物もうべし。こまとうのうちへりそぞ。
母さへむほくありゆづ。どうやさん。眾うれすといひ釋て。教こそ
とも。行ふせん。犯はぬ替死牙よ負て。才を放て。母も歎び。餘命を
保たふねば。まううりくと。トトとらふらひ定かて。盜賊うるとなふを
ま。あれど。廷尉へ人のことを照らし。虚実を察する。と。愚考らぬ
彦よ異なる。後。かくちもれゆひぬ。の。司三郎と。見ゆひ。京宮
代じきと。紅涙と袖小拭ひ。がちもろく演へ。うば。うの坐よ感涙を
拭ひ。のぞ。おて。司三郎を。戸によて。車の趣と。強あじ。ままでと。口の

名告ぬまむる。司三郎も。又ひくうち泣て。承く。兄京室を免て
まひて。甚ぞ罪うひまくと。胞足を送ふ余を惜び。兄は才ふ代らんと
いひ。弟は兄を助んと。争ひ。その争ひの滅う。生て。いとも愛よれ孝情忠
信。當今多く。忍ぐれ社伎。宣うづかる。公操り。そ。縱貧苦不迫る。と。も
りで。不善の行ひをうそどき。との盜賊へ。決して別よあは。と。らひ。うべ
幸子七郎。源羽十郎。ふ計策を授て。潛よ賊を。空太鑿金もる。ふ果て。だ潜
小袖を。禍獲う。且彼兄弟が素姓と聞ふ。と。も。羽廉杖武盛が。未禁ふて
平家世。さううる。比へ。羽一翁ふ領。うれども。子孫豊。富。そ。商。富。ハ
る。よ。家譜連綿として。疑ひ。ベキ。不。且司三郎ハ。幼稚より。院書。學
せよ。これと。戒ふ。宏才廣博。書。と。て。及。する。所。か。り。で。金刺。り。と
まふ。ふ。う。り。や。糞。綱。彼木。が。孝情を。感。る。の。あ。そ。う。北條殿へ。吹え。わ。け

まほしう。執權持ふ勧賞と加えらる。僧景空の簾幕極乐寺法華堂
の別當小補せられ。才司三郎ハ金刺図書小代らして六浦莊司より任ぜられ。
兼て金澤文庫の学改を補し五百貫の莊園と完行する就中金刺
圖書の約半分を女婿と寛て月と鹿島の所とみせり且園門園
にほどて家事治じべり。そぞ大莊と管領し。書生教育の任を堪能
信と折盤を加えらる。けど格別恩免の沙汰とめて主人頗時々
領下へゆきり。速す女見十六夜ありて。司三郎小妻一。その家へ隠
居す。信と亡友ふ全玉。又子母家利九郎ハ僅ニ一盞の笠と襷と
あて。清修景空と摑捕卒。余の旅をうそとりくとも犯人既に隸体
を殺りて。是れの油冷よ及び。又高耐物与世四郎ハ旅客乃物を
買ふ。券書とあく。そ賣買の方等用あれども出知正ア紀物うそと
りて此度ハ恩免せらる。向後を信と慎むべ。又司三郎が考を母大蔵の
旅宿ふ病臥する。わその子の摑捕られ。はしを咬て駄歎をくろ。
死んで。死んとせり。あくるふ日。その子をめよ。司三郎の孝子あるは。晴
と云ふ。憐み。竊ふ旅宿の亭主。小分け。叮嚀ふ。首病に。更ふ一個の
醫師ふ。命じ。療治を加ぬ。させ。性令と全ど。のこり。一個の
子どもが。やく。あれ。福と獲て。おのく。名と顕家と。與。とよ。と。安て。
病病頬ふ。差されば。今日この如く。よ。食この角と。こう。と。貰ひ。と。安て。
然として。祝願されば。備の障子と推開して。極乐寺の権上人。是
その方六浦莊司。兼金澤文庫の学改。井司三郎の法衣。礼服。暗
や。お。駁。て。考母大蔵。り。う。共よ。青底。と。す。と。再解。執權北條殿の仁政

153

りて此度ハ恩免せらる。向後を信と慎むべ。又司三郎が考を母大蔵の
旅宿ふ病臥する。わその子の摑捕られ。はしを咬て駄歎をくろ。
死んで。死んとせり。あくるふ日。その子をめよ。司三郎の孝子あるは。晴
と云ふ。憐み。竊ふ旅宿の亭主。小分け。叮嚀ふ。首病に。更ふ一個の
醫師ふ。命じ。療治を加ぬ。させ。性令と全ど。のこり。一個の
子どもが。やく。あれ。福と獲て。おのく。名と顕家と。與。とよ。と。安て。
病病頬ふ。差されば。今日この如く。よ。食この角と。こう。と。貰ひ。と。安て。
然として。祝願されば。備の障子と推開して。極乐寺の権上人。是
その方六浦莊司。兼金澤文庫の学改。井司三郎の法衣。礼服。暗
や。お。駁。て。考母大蔵。り。う。共よ。青底。と。す。と。再解。執權北條殿の仁政

廷尉齋綱の明斷を感佩し。且再生の鴻恩と謝一筆をば金鑑
に慚愧後悔して背ふ冷せりる汗を流し。席ふも絶縁ぬ可り。是
十六夜ハ父の為ふことを死復ミ良人の為ふことを教び。ちやく
受くるみを。与並四郎。利九郎。ホハ駿我。トテかそれ特ミ只官廷景
綱の聰察よ感謝せり。當下益徳ハ司三郎不對。金刺グ判状浮遊小
走て伝ひ。辨候ふて利よ遂ふとりども汝が爲すハ一字の師心奉ふて且
圖書が妻鞍ハその性怜憐して才よ良人と諭す。よ。嘆惜す。あまば老若
の礼をりそ。宜く舅姑を扶助せし。又金刺が老僕繁市が女兒弱せ。狂
死せ。も原是汝と十六夜が色情より起まつ。あらび彼繁市ハ老しく
後ふ女見を喪ひ。その主さくふ隠居せば迷惑至極。と。至りの司三郎ハ
圖書ふ乞て繁市と家僕にて懇切よ召使ひ。と残るくまろく説諭。

又卒子七郎。浅羽十郎と戻そ。地滑と東太小袖我木ハあゆ由井瀧木口にて。
速み首を刎へ。首を下氣。既ふ團圓。己財を益徳茅を捺て判くと道。
白衣の市人青侍とある。原是各学ふあり。一個ハ少。一個ハ老。彼ハ
佞。此ハ賢。一茶一枯。今と奈何。魚木ハ母の爲ふ祈て。一子を浮
屠家と進む。一人生家の功德をりて。九族脩く榮采と受。如此孝
門亦復孝。孟出生と。一個ハ僧。一個ハ儒。言行一奚ぞ先達よ。處人。
闺女情と慈て。坐ふ禍胎と釀し。奸賊首と献ア。そ。嗜よ冤枉と解。
王事監。皇天戒と照。善と勧め。惡と懲。と。後世子教よ。
判一ノて筆を閣。衆皆暇を有り。其の再拜稽首。文注所とぞ退出り。

